



Alter Weekly Order Catalogue

ほんものを
たべよう **B**

2025.9月3週号

提出日					
9/	火	水	木	金	
	9	10	11	12	
配達日					
9/	火	水	木	金	
	16	17	18	19	
翌々週配達日					
9/	火	水	木	金	
	23	24	25	26	

オルターの提案

本当に安全な食べものを手渡すために

- 「だれが・どこで・どのようにつくったか」の情報を日本一公開します。
- 「国産」「無農薬」にこだわり、日本の伝統食を守ります。
- 原料段階・飼育段階からポストハーベスト農薬、遺伝子組み換え、放射能汚染、トランス脂肪酸、食品添加物などを徹底的に追放します。
- プラスチック容器・レトルト食品を追放します。

米

世界農業遺産、 魚のゆりかご水田米

湖魚が産卵、成育できる水田を取り戻す

せせらぎの郷

文責 西川 榮郎(オルター代表)



せせらぎの郷の藤岡 いづみさんと八尋 由佳さん

農薬不使用栽培

滋賀県野洲市にある、須原魚のゆりかご水田協議会 せせらぎの郷、藤岡 いづみさんは父、堀 彰男さんが2015年から始めた農薬、化学肥料を使わない農法を受継ぎお米を栽培しています。除草剤を1回使う水田もありますが、オルターへは農薬不使用米だけを出荷していただきます。

魚のゆりかご水田プロジェクト

滋賀県では湖魚が産卵、成育できるかつての水田環境を取り戻そうと「魚のゆりかご水田プロジェクト」が取り組まれています。ふなずしに用いられるニゴロブナ(2007年には絶滅危惧種に指定された)などの湖魚(琵琶湖には多くの固有種が生息しています)がはるか昔から、湖辺の湿地帯(ヨシ帯や一時的に水域となる浅瀬)を産卵の場としてきました。人々が湖辺で米作りをするようになってからも、ニゴロブナのそ



の営みは変わらず、田んぼを産卵に使用するようになりました。現代でも春、代かきを終えた田んぼに水が張られると、ニゴロブナは産卵のために田んぼを目指します。

しかし近年、圃場整備により田んぼと用水路の高低差が2m近くになり、湖魚が田んぼに遡上しにくくなったり、農薬によりその生息に悪影響を与えるようになっていました。

そのため「魚のゆりかご水田プロジェクト」では水田に湖魚が入りやすいように水路を階段状に整備し、産卵をうながすこと、除草剤など魚毒

性の低いものに切り替えることなどを行い、湖魚のゆりかごである水田を守る取り組みを行っています。

しかし、「魚のゆりかご水田プロジェクト」に参加しているほとんどの農家は、減農薬レベルではありません。農薬不使用米を認める消費者を増やして、オルターとしてもこの「魚のゆりかご水田プロジェクト」を応援したいと思います。

世界農業遺産に認定

「エリ漁」など琵琶湖の伝統漁業や、琵琶湖の魚が産卵や繁殖にやってくる「魚のゆりかご水田」、水環境や生態系の保全に寄与する「環境こだわり農業」や、水源林の保全など滋賀の風土と歴史の中で生み出されてきた「琵琶湖と共生する農林水産業」、この琵琶湖システムが2022年7月「世界農業遺産」に認定されました。

この琵琶湖システムの中心的な活動をせせらぎの郷、堀 彰男代表(元)が2008年から担われてきました。堀さんは昨年2024年体調を崩し、堀さんの「ゆりかご水田」は、現在、堀さんの娘さんの藤岡 いづみさんとオルターカタログ2024年6月2週号でご紹介した有機大麦ストローの八尋 由佳さんが担われています。

オルターへの堀さんの紹介は、世界農業遺産専門家会議委員を務めた大和田 順子同志社大学政策学部教授からでした。



水路



魚のゆりかご水田の魚道

せせらぎの郷の農薬不使用 魚のゆりかご水田米 ☆☆☆

●品種

コシヒカリ

●防除

農薬の使用ありません

●施肥

ハイグレード有機11号



排水路から田んぼへ入るフナ



生きもの観察会